



## 目次

第1章 本調査研究の目的.....	3
1節 調査研究の目的.....	3
2節 調査研究の内容.....	3
第2章 方法.....	4
1節 対象者.....	4
2節 実施プログラム.....	4
3節 調査・測定内容.....	5
1項 指導内容.....	5
2項 測定・調査項目及びそのプロトコル.....	8
3項 形成的授業評価項目.....	11
第3章 結果.....	13
1節 実施報告書.....	13
2節 基礎的運動能力への効果.....	23
3節 形成的授業評価.....	28
第4章 本調査研究の総括.....	29
1節 本調査の結果の成果.....	29
2節 本調査研究の課題とまとめ.....	29
謝辞.....	30

## 第1章 本調査研究の目的

### 1節 調査研究の目的

近年では子どもの体力の低下が社会的に問題視されている。小学校で毎年実施されているスポーツ庁による全国体力・運動能力、運動習慣等の調査の結果にて、体力合計点に関して、令和元年度調査から連続して小・中学校の男女ともに低下していることが報告されている(2022. スポーツ庁)。体力の低下やスクリーンタイムの増加は、コロナ禍による行動自粛や対面コミュニケーションの減少が一要因として報告されている。本委託研究の目的は、大学生による専門的な知見を活用した多様な運動プログラムを考案し、大阪府豊中市の子どもたちが楽しみながら基礎的基本的な体の動かし方を育成することができるコーディネーショントレーニングプログラムを実施し、基本的な体力及び運動能力への効果及び、運動への取り組み姿勢として形成的授業評価が変容するかを検証することとした。

### 2節 調査研究の内容

本研究においては、大阪府豊中市南桜塚小学校第1年学年から第6学年までの46人を対象者とした。実施場所は、同南桜塚小学校体育館を使用し、低学年及び高学年各1時間(60分)実施を月に1回、10ヶ月間で計10回のプログラムを実施した。プログラム内容に関しては以下9項目を留意して独自のプログラムを開発した。

- ① コーディネーショントレーニング等、子どもの体力向上や運動習慣の育成等につながる内容にすること。
- ② 運動初心者や運動が苦手な子どもにも取り組みやすい内容にすること。
- ③ スポーツに好意的な印象を持ち、自発的及び継続的に取り組める内容にすること。
- ④ 低学年と高学年に分けるなど、年齢や習得度に応じた内容にすること。
- ⑤ 募集に係るチラシを作成すること。
- ⑥ 効果を測るための体力測定及び意識調査アンケートを実施すること。
- ⑦ 体力測定は、「長座体前屈」・「反復横とび」・「立ち幅とび」を基本種目とすること。その他の種目については、各大学の任意とする。
- ⑧ 意識調査アンケートでは、「子どものスポーツに対する意識の変化」を調査すること。その他の項目については、各大学の任意とする。なお、意識調査アンケートは毎回実施することが望ましい。
- ⑨ 事業実施ごとに任意の報告書(実施内容、参加人数等記載したもの)を提出すること。

## 第2章 方法

### 1節 対象者

大阪府豊中市立南桜塚小学校の第1学年10名、第2学年14名、第3学年7名、第4学年6名、第5学年4名、第6学年5名の計46名の児童を対象とした(表1)。

表1 参加対象者一覧

学年(年生)	人数(名)
1	10
2	14
3	7
4	6
5	4
6	5
計	46

### 2節 実施プログラム

期間は令和4年(2022年)6月から令和5年(2023年)3月までの10か月とし、月に1回の運動プログラムを実施した。効果を測るため、第1回と第9回において体力テスト、すべての回において意識調査アンケートを実施した。第2回から第8回ではコーディネーショントレーニング(定位、バランス、反応、リズム、分化、結合、変換)を中心とした運動を実施した。第10回においては、第9回までの運動プログラムを通して子どもたちの希望に応えた運動を実施した(表2)。

実施プログラムの目的は、運動プログラムの開発、実践、効果測定を行い、体力の向上や運動に対する意識の変化等を検証することとした。

表2 各回におけるコーディネーショントレーニングテーマ一覧

第1回	プレテスト
第2回	定位、バランス
第3回	定位、反応
第4回	定位、バランス
第5回	分化、バランス
第6回	分化、反応
第7回	分化、リズム
第8回	結合、変換
第9回	ポストテスト
第10回	まとめ

### 3 節 調査・測定内容

#### 1 項 指導内容

以下に各回において実施したトレーニング指導内容を示した。

#### 第1回 6月19日 参加者:低学年21人、高学年14人

第1回目では導入運動としてしっぽ取りを行った。これはグループに分かれ、ビブスをしっぽとし実施した。測定では、長座体前屈、反復横跳び、立ち幅跳び、片足立ち、20m走、飛び越しくぐりを実施した。測定は5つのグループに分かれて行った。長座体前屈では、2回ずつ測定した。

#### 第2回 7月30日 参加者:低学年18人、高学年13人

第2回目では、ウォームアップ後に、初めてのコーディネーショントレーニングとして、特に定位能力を向上させるトレーニングに取り組んだ。具体的には、マーカースター往復走に取り組んだ。その後、反応能力を向上させるトレーニングとして、ボール取り対抗戦、さらには、スカーフキャッチに取り組んだ。加えて、バランス能力を育成させるトレーニングとして、バランスストーン及び、スラックラインに取り組んだ。

#### 第3回 8月7日 参加者:低学年12人、高学年10人

第3回目では、ラダーを用いたステップワークとして、ウォームアップを行った後、定位能力を向上させるトレーニングとして、スポーツリバーシ及び、ドッジビーに取り組んだ。その後、反応能力を育成させるトレーニングとして、リアクションボールのプログラムに取り組んだ。

#### 第4回 9月11日 参加者:低学年15人、高学年13人

第4回目ではリズム能力および定位能力を中心としたマリオネット、障害物競走および王様ドッジボールを実施した。

マリオネットでは以下の順序で行った。ただし④に関しては高学年でのみ実施した。

- ①手と足の動きを同じにする
- ②手と足の動きを逆にする
- ③手はグー・パー/足はグー・パー・チョキ
- ④手は肩・頭・真上で拍手/足はジャンプ

障害物競走では20分の制限時間を設け、以下の順序で行った。①から③まではリズム能力、④は定位能力を高める運動である。

- ①フラフープでケンケンパー
- ②縄跳び
- ③マリオネット
- ④キャスター付きの椅子をゴールまで押す

王様ドッジボールは以下の順序で実施した。

- ①各チーム1名の王様を決める
- ②自チームの王様がボールに当たらないように他のメンバーは守る
- ③王様が当てられ次第ゲームを終了とする

**第5回** 10月23日 参加者:低学年13人、高学年11人

第5回目では分化能力及びバランス能力を中心とした運動を実施し、低学年・高学年で実施内容は同じとした。分化能力トレーニングでは、自己投捕球動作トレーニングを実施した。自己投捕球動作とレーニングとは、テニスボールを自分の頭上から約3m 投げキャッチする動作を繰り返した。その後、ボールを投げたからキャッチするまでに何回手を叩くことができるか実施した。

バランス能力トレーニングでは、スプーンバランストレーニングを実施した。スプーンバランストレーニングでは、スプーンにピンポン玉を乗せ平均台を渡った。また、スプーンにピンポン玉を乗せたまま平地で約15mの距離にあるコーンを回り次走者にパスをするリレーも実施した。

**第6回** 11月13日 参加者:低学年13人、高学年10人

第6回目では導入運動としてリアクションボールを行った。これは周りとはぶつからないように十分なスペースを確保し、個人でリアクションボールを上に向けてワンバウンドしたリアクションボールを落とさずにキャッチできるように取り組んでもらった。この際バウンドしたボールに素早く反応できるように足踏みしておくよう指示した。ある程度、慣れてきたら右手で投げて左手でキャッチするなど投げ方・取り方を工夫した。

その後、しっぽ取り、ボールキャッチ、リフティング、パストレーニングを行った。しっぽ取りは、力が均等になるように男女の比率、学年などを考えて4~5人チームを2チーム以上できるようにチーム分けをしてマーカーをコート両サイドと真ん中の3か所に置いた。2チームを真ん中のマーカーの所に立たせ、「じゃんけんで勝った人・名前を呼ばれたチーム」が追いかけて、「じゃんけんで負けた人・名前を呼ばれなかったチーム」はしっぽを取られないようにサイドのマーカーまで逃げてもらった。ただししっぽを取って良いのは目の前の相手だけとした。逃げきれたら「逃げの勝ち・追いの負け」、マーカーまでにしっぽを取られたら「逃げの負け・追いの勝ち」となった。ゲームに慣れてきたら逃げ(追いかけて)方を走る以外にクマさん歩き・ケンケン・ペンギン歩きのように変えたり、対戦相手を変えた。最後に今まで獲得したしっぽの数を教えて多いチームの勝ちとした。

ボールキャッチは3つの班に分けて1班1人の大学生が帯同した。大学生に投げられたボールを2m前のコーンのところでキャッチする・大学生に投げられたボールを前転してキャッチ・1人で投げたボールを前転してキャッチというように徐々にレベルを高くした。リフティングは10回を目標に、ピンポン玉を卓球ラケットで・シャトルをバドミントンラケットで・ボールを足でと3段階のレベルで行った。パストレーニングは1つのボールでノーバウンドとワンバウンド・2つのボールで片方は山なりでもう片方はワンバウンド・班のみなどで円になって右隣の人にパスをする(ワンバウンド)という3段階のレベルで行った。

**第7回** 12月10日 参加者:低学年11人、高学年12人

第7回目では導入運動としてボール運び競争を行った。これは同じチーム内で身長の高低差がある方が

難易度が高く、2グループに分かれて1列に並んで前から後ろへボールを頭の上・股の下・両方交互・左右交互のように様々な運び方で競走した。メインの内容として大縄、的当て、遠投、王様ドッチボールを行った。大縄は大学生が縄を回し、レベル1動かさずジャンプ、レベル2 ゆらゆらしてジャンプ、レベル3回してジャンプ、レベル4マーカー集めジャンプのように難易度を徐々に高めた。レベル4はゲーム性を持たせるためにもジャンプする側と反対側にマーカーをたくさん置いて、時間内にどれだけマーカーを集められるかを2チームで争った。的当ては、止まっている的(5箇所)と動いている的(1箇所)をあわせた計6ステーションを作り、利き手下投げ・逆の手下投げ・利き手上投げ・逆の手上投げと徐々に難易度を高めた。利き手下投げで6ステーションクリアできたら大学生に報告して逆の手下投げに挑戦するというようにレベルアップしていった。なお、途中でどうすれば上手く当てられるかコーチングも入れた。遠投はどこまで遠くに投げられるかといった効率的な投げ方をレクチャーしてから行った。王様ドッチボールは、能力の高い子だけが活躍しないように学年に応じて利き手とは逆の手や女子は2回当たったらアウトというようなルールを工夫した。

#### **第8回** 1月29日 参加者:低学年12人、高学年8人

第8回目では導入運動としてじゃんけん変換リレーを行った。児童は2列に並び、それぞれの列の対面に大学生1人が立ち、大学生を目がけて走る。そこから、「じゃんけん・ぼん・ぼん」のリズムで1回目の「ぼん」は大学生、2回目の「ぼん」は児童というように、後出しじゃんけんでは大学生に勝つようにした。最初は手で後出しじゃんけん、最後は足で後出しじゃんけんを行った。

メインの内容としてトンネルくぐり、ボール落とし、バイバイ鬼を行った。トンネルくぐりは4人1組に分かれ、マットの上に3人、マットの外に1人ボールを持って出ることとした。マット上の3人はブリッジなど手足を床に付けてトンネルを作り、ボールを持った児童がトンネルにボールを転がし、トンネルにぶつからないように転がすことができたなら次の人と交代、ぶつかったらやり直しのようにリレー方式で競走した。

ボール落としはそれぞれボールを左手で持ち、右手で相手のボールを落とすといったようにしっぽ取りの要領で児童と大学生全員参加で行った。バイバイ鬼は床に置かれたフラフープ内はバリアエリアとして1フラフープにつき1人入ることができ、鬼はタッチできないが、逃げている人はフラフープの中に人がいたら「バイバイ」と言ったら、中に元々いた人は出なければならず、「バイバイ」といった人が中に入ることができるといったルールで行った。これも児童と大学生全員参加で行い、「けんけん」「はいはい」「歩き」「横歩き」など大学生に指示された逃げ方でその都度変えて行った。

#### **第9回** 2月18日 参加者:低学年12人、高学年9人

第9回目では、これまでのトレーニング効果を検証するための、ポストテストを行った。実施プロトコルは、第1回目と同様のプロトコルで、4人程度のグループに分かれ、長座体前屈、反復横跳び、立ち幅跳び、片足立ち、20m走、飛び越しくぐりを順に測定した。

#### **第10回** 3月19日

第10回目では児童たちが今までのプログラムで好意を持ってくれたものを重点的に行った。内容はしっぽ

取り、スラックライン、的当て、ドッチボール、ドッチビーを行った。

## 2項 測定・調査項目及びそのプロトコル

実施プログラムの効果検証として、基礎的運動能力の検証を行った。基礎的運動能力として、長座体前屈、反復横跳び、立ち幅跳び、片足立ち、20m 走、飛び越しくぐりを測定した。各測定項目のプロトコルは、以下の通りとした。

### 長座体前屈

- (1)初期姿勢:被測定者は、両脚を測定器の間に入れ、長座姿勢をとる。壁に背・尻をぴったりとつける。ただし、足首の角度は固定しない。肩幅の広さで両手のひらを下にして、手のひらの中央付近が、厚紙の手前端にかかるように置き、胸を張って、両肘を伸ばしたまま両手で箱を手前に十分引きつけ、背筋を伸ばす。
- (2)初期姿勢時のスケールの位置:初期姿勢をとったときに、測定器のボタンを押下する。
- (3)前屈動作:被測定者は、両手を測定器から離さずにゆっくりと前屈して、測定器を真っ直ぐ前方にできるだけ遠くまで滑らせる。このとき、膝が曲がらないように注意する。最大に前屈した後に厚紙から手を離す。
- (4)2回の試行のよい記録を代表値とする。

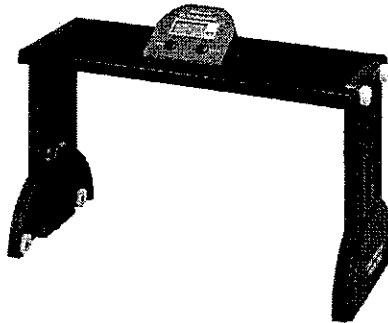
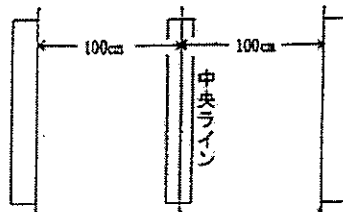


写真 1 長座体前屈計

### 反復横跳び

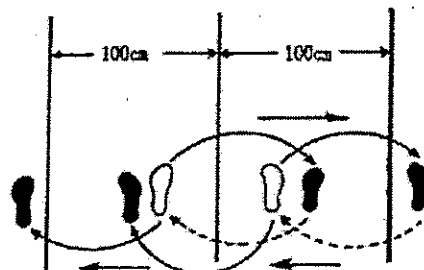
- (1)床の上に、図のように中央ラインをひき、その両側 100cm のところに2本の平行ラインをひく。ストップウォッチを用いて測定する。



- (2)中央ラインをまたいで立ち、「始め」の合図で右側のラインを越すか、または踏むまでサイドステップし(ジャンプしてはいけない)、次に中央ラインにもどり、さらに左側のラインを越すかまたは触れるまでサイド



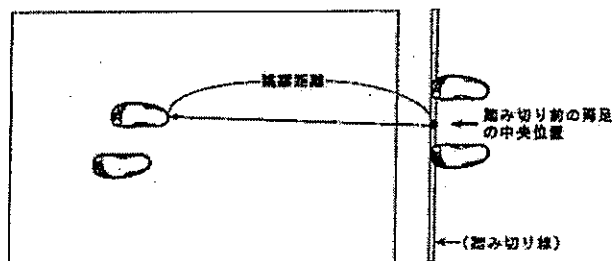
ステップする。



(3)上記の運動を20秒間繰り返し、それぞれのラインを通過するごとに1点を与える(右、中央、左、中央で4点になる) テストを2回実施してよい方の記録をとる。

#### 立ち幅跳び

- (1) 両足を軽く開いて、つま先が踏み切り線の前端にそろうように立つ。
- (2) 両足で同時に踏み切って前方へとぶ。



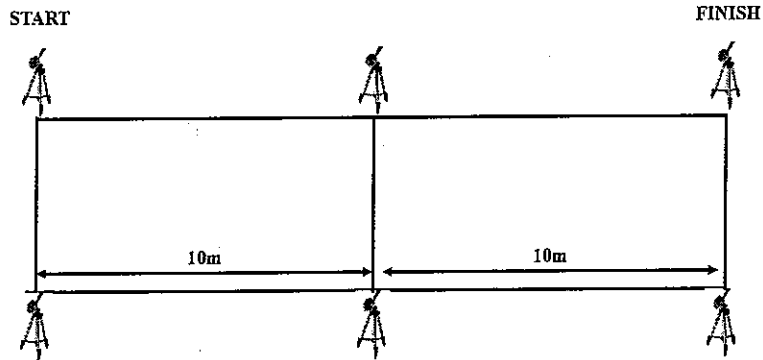
- (3) 身体がマットに触れた位置のうち、最も踏み切り線に近い位置と、踏み切り前の両足の中央の位置(踏み切り線の前端)とを結ぶ直線の距離を計測する(上図参照)
- (4) 記録はセンチメートル単位とし、センチメートル未満は切り捨てる。
- (5) 2回実施してよい方の記録をとる。

#### 片足立ち

- (1) 両手を腰にあて、両目をつぶり、左右どちらでも立ちやすい側の足で片足立ちになる。
- (2) 上げた足は軸足には触れないようにして、高さとか位置は自由。
- (3) 軸足が少しでもずれたり、上げた足が床に着いた時点で終了。その時間を測定する。
- (4) 2回行い、長いほうの時間を記録する(右足と左足を交互に行う)

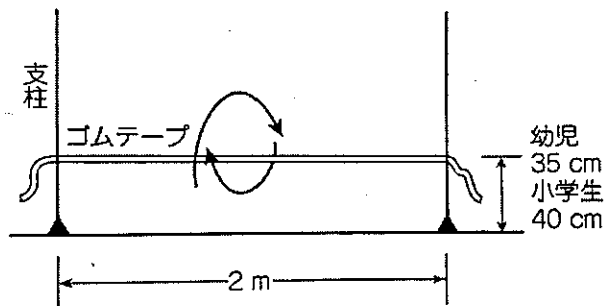
### 20m 走

- (1) 20メートルコースを設定し、スタート、10m 地点、及び 20m フィニッシュ地点に、光電管ゲートを設置する。
- (2) スタートの合図で走り始め、10m 地点、及び 20m フィニッシュ地点の記録を測定する。
- (3) 2 回の測定結果の、より早い方の時間を記録とする。



### 飛び越しくぐり

- (1) はじめの合図により、片足踏切で地上に張ってあるゴムテープを飛び越える
- (2) すぐに片手また両手を床について、次にくぐって立ち上がる。
- (3) この動作を 5 回繰り返し、要した時間を計測する。



### 3 項 形成的授業評価項目

実施プログラムの授業への取り組み姿勢への効果検証として、毎時間の形成的評価を行った(長谷川ら、1995)。形成的評価の評価項目を以下に示した(表3)。

表 3 形成的授業評価シート

今日のプログラムを振り返ってあなたの感想を聞かせてください。

1	精一杯運動に取り組むことができましたか。	はい・いいえ・どちらでもない
2	今まで出来なかったことが出来るようになりましたか。	はい・いいえ・どちらでもない
3	楽しかったですか。	はい・いいえ・どちらでもない
4	自分から進んで学習に取り組むことができましたか。	はい・いいえ・どちらでもない
5	「あっ、わかった!」や「あっ、そうか!」と思うことはありましたか。	はい・いいえ・どちらでもない
6	友達と協力して、仲良く学習できましたか。	はい・いいえ・どちらでもない
7	友達とお互いに教えたり、助けたりしましたか。	はい・いいえ・どちらでもない
8	深く心に残ることや、感動することがありましたか。	はい・いいえ・どちらでもない
9	今日の目当てを達成できましたか。	はい・いいえ・どちらでもない
プログラムの中で特に楽しかったことを書いてください。		自由記述
プログラムの中で特に頑張ったことや難しかったことを書いてください。		自由記述
大学生へのメッセージがあれば書いてください。		自由記述

全10回のプロジェクトの内、プレテストとポストテスト、最終回(3月19日)を除く、7回分において形成的授業評価を行った。形成的授業評価の調査用紙には、長谷川ら(1995)の小学校用の形成的授業評価尺度を用いて作成した。形成的授業評価は表4のように「成果」、「意欲・関心」、「学び方」、「協力」の4因子、各因子2~3項目の全9項目で質問が構成されている。回答形式については、3段階評定法を用い、それぞれの質問項目を「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」の順に、5, 3, 1点と得点化し、各因子を対応する質問項目の合計得点から平均点を算出し、因子別及び総合評価を行った。

表 4 形成的授業評価尺度の質問項目とその因子名

質問項目	因子
①ふかくこころにのこること、かんだうすることがありましたか。	成果
②いままでできなかったこと(うんどうやさくせん)ができるようになりましたか。	
③「あつ、わかった」とか「あつ、そうか」とおもったことがありましたか。	
④せいいっぱい、ぜんりよくをつくしてうんどうすることができましたか。	意欲・関心
⑤たのしかったですか。	
⑥じぶんからすすんでがくしゅうすることができましたか。	学び方
⑦じぶんのめあてにむかってなんかいもれんしゅうできましたか。	
⑧ともだちときょうりよくして、なかよくがくしゅうできましたか。	協力
⑨ともだちとおたがいおしえたり、たすけたりしましたか。	

### 第3章 結果

#### 1節 実施報告書

6月19日～3月19日の10ヵ月にわたり、月1回(全10回)実施してきたトレーニングプログラムの内、プレテスト(6月19日)及びポストテスト(2月18日)を除く、立命館大学スポーツ健康科学部の上田ゼミに所属する学生12名が考案したコーディネーションプログラムを実施した。そのうち8回分において、実施後に活動報告書を作成した(表5～13)。

表5 第2回(7月30日)実施報告書

実施日時	令和4年 7月30日(日) 実施時間 9時30分 ～ 12時00分
会場	豊中市立南桜塚小学校体育館
対象学年	クラス1:第1学年～第2学年, クラス2:第3学年～第6学年
講師名 (氏名・所属)	上田憲嗣(立命館大学)及び上田ゼミ学生5名
実施内容 及び所見等	<p>1 実施内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ウォームアップ</li> <li>● 定位能力トレーニング(マーカースター往復走)</li> <li>● 反応能力トレーニング(ボール取り対抗戦&amp;スカーフキャッチ)</li> <li>● バランストレーニング(バランスストーン&amp;スラックライン)</li> <li>● 振り返り</li> </ul> <p>2 所見</p> <p>児童期に感受期を迎える運動能力である動作コーディネーションの能力を育成することが重要となるが、特に第2回では、基本となる空間での運動の方向性を示す定位能力と、外界の刺激にできるだけ素早くそして、正確に反応するための求められる反応能力、さらには、自身の体をより精細に動かすためのバランス能力に特に着目して実施した。非常に暑い中での実施となったが、どの参加児童も積極的に運動に取り組み、運動に対する満足感を得ている様子が認められた。プログラム後に記述させたい最後の振り返りシートの結果をみても、運動に対する満足感が得られた様子が伺える。特にスラックラインが物珍しさもあつてか、多くの参加者より再度実施してみたいという希望が挙げられていた。</p>

表 6 第3回(8月7日)実施報告書

実施日時	令和4年 8月7日(日) 実施時間 9時30分 ~ 12時00分
会場	豊中市立南桜塚小学校体育館
対象学年	クラス1:第1学年~第2学年, クラス2:第3学年~第6学年
講師名 (氏名・所属)	上田ゼミ学生5名
実施内容 及び所見等	<p>1 実施内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ウォームアップ(ラダー)</li> <li>● 定位能力トレーニング(スポーツリバーシ、ドッジビー)</li> <li>● 反応能力トレーニング(リアクションボール)</li> <li>● 振り返り</li> </ul> <p>2 所見</p> <p>3 回目にもなって児童も慣れてきたのか、たくさん話してくれるようになった。開始前から並べてあるラダーに興味を持つ子や、フリスビーで遊ぶ子もいて楽しみに来てくれたと感じた。目標について話す際、定位能力や反応能力の説明に関して一人の小学生に理解できるか聞いてみたところ、難しいと言っていたためよりかみ砕いて目標を説明する必要があると考える。また、振り返りの際、目標は達成できたかの問いに関して目標って何と聞く児童が多かったため、目標は一言でわかりやすく伝えた方が良いと感じた。</p> <p>ラダーでは、できている子とできていない子の差はやや見られたが、大学生のフォローでほとんどの児童ができるようになっていた。口や手でリズムを刻むと小学生は動きやすそうだった。リアクションボールでは競争性が含まれているため、全力でボールを追いかける姿が見られた。スポーツリバーシでは、簡単すぎるのではと心配だったが、意外と難しそうにやっている本人も周りも盛り上がっていた。</p> <p>ドッジビーに関しては、ボールを投げる児童が固定されており、なかなか投げる機会が回っていない児童も見られた。周りの大学生がいかにかいい声掛けできるかが重要だと感じた</p>

表 7 第 4 回(9 月 11 日)実施報告書

実施日時	令和 4 年 9 月 11 日(日) 実施時間 9 時 30 分 ~ 12 時 00 分
会場	豊中市立南桜塚小学校体育館
対象学年	クラス 1:第 1 学年~第 2 学年, クラス 2:第 3 学年~第 6 学年
講師名 (氏名・所属)	上田憲嗣(立命館大学)及び上田ゼミ学生 7 名
実施内容 及び所見等	<p>1 実施内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ウォームアップ(じゃんけん列車)</li> <li>● 定位能力トレーニング(ドッチボール(低学年のみ)・障害物競走)</li> <li>● リズム能力トレーニング(障害物競争・マリオネット)</li> <li>● 振り返り</li> </ul> <p>2 所見</p> <p>今回はリズム能力と定位能力にフォーカスを当て運動を行った。始めの準備運動の際に、列車を作りコミュニケーションを取ったり、体に触れ合ったりする中で、緊張感などがほぐれていて、子ども達が笑顔になっていた。プログラムを行う中で、1 ヶ月に 1 回の開催なので、導入部分は他の運動を始めるにあたって精神面でもとても重要なことであると感じた。リズム能力で行ったマリオネットでは、レベルを徐々に上げていくことで、難しい動きにも積極的に挑戦してくれる姿が見られた。できた子ども達が大学生に言いに行っている姿も見られ、大学生と子ども達との距離が縮まり、コミュニケーションも取ることができていた。定位能力とリズム能力のどちらをも融合した障害物競走では、競争を行うことで子ども達のやる気を引き出すことができたと感じた。低学年と高学年では種目を変更し、少し難しくした。さらに高学年のレースでは、一人一種目ではなく、一人一周行うことで、苦手な種目にも挑戦することができるようにした。低学年でも苦手な種目にも挑戦してもらえるようにすべきだったと感じた。低学年の実施の際に子ども達がドッチボールをしたいと言っていたので、予定通りドッチボールを行ったが、障害物競走をもう一度一人一周に変更し行ってもよかったと思った。</p>

表 8 第 5 回(10 月 23 日)実施報告書

実施日時	令和 4 年 10 月 23 日(日) 実施時間 9 時 30 分 ~ 12 時 00 分
会場	豊中市立南桜塚小学校体育館
対象学年	クラス 1: 第 1 学年~第 2 学年, クラス 2: 第 3 学年~第 6 学年
講師名 (氏名・所属)	■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ (立命館大学スポーツ健康科学部)
実施内容 及び所見等	<p>1 実施内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ウォームアップ(バランスゲーム)</li> <li>● 分化能力トレーニング(自己投捕球動作トレーニング)</li> <li>● バランス能力トレーニング(スプーンバランストレーニング)</li> <li>● 振り返り</li> </ul> <p>2 所見</p> <p>今回は分化能力とバランス能力に関して焦点を当てて講義を行った。これまでの報告書にも既述されているように、月に 1 度程度しか開催されていない為、授業対象者が到着してから、講義を始めるまでの時間に関しても話しかけたり、一緒に運動したりするなどの生徒管理をする必要があり、その時間が後の講義の導入部分でのテンションに関係しているということが分かった。</p> <p>自己投捕球動作トレーニングについては、低学年と高学年で運動能力の差が大きく出たが共通して感じたことは、考えることの大切さである。両講座共通して初めはボールを真上に投げると言うことに意識がなく、投げたボールをとることに意識が偏っていたため、ボールを捕球するのが難しいところに投げてしまっている生徒がほとんどであった。しかし、一度生徒を集まさせボールをどうしたらとりやすいか考えさせ、生徒から答えを導くことでボールを「真上に」「高く」あげることが重要であり、捕球に関してはその条件の次に付随して重要であると追うことが理解させることができた。そして、理解してからに関してはほとんどの生徒が捕球できるようになり、手をたたく動作に関してもたたく回数が増え、高学年に関しては 10 回手をたたいて捕球できる生徒もいた。</p> <p>また、ボールに関しては 3 人で隣の人にボールを回していくという動作の中で自身の捕球よりも、隣の人が捕球しやすいボールをトスすることを全員が意識することで結果として全員が捕球しやすくなるということに関して、低学年に関しては発問をしても手がかりなしに答えを導くことは難しかったが活動が続ける中で理解することができており、後半に関しては成功する班が増え、継続して成功していた班に関しては成功率が高まっていた、加えて、高学年に関しては、少し考えることですぐに答えを出すことができた。</p> <p>上記のようにボール活動に関しては、生徒にポイントを尋ね答えを促すことで理解して活動に取り組むと言うことができるようになった。そのため、小学生と言ったこれまでの既習知識</p>



が少ない授業対象者に関しては、主体的に考え行動に移すといった流れをより一層大切に  
する必要があったと感じた。

バランス能力に関しては、スプーンにピンポン球を乗せてバランスを保つという既習内容で  
の活動であったが、低学年に関してはそのまま歩行することも難しそうであったため、その前  
に何か上半身を使ったバランス能力に関する予備運動があれば、より活動が円滑に進めるこ  
とができたと感じた。

しかし、この活動に関してもボール活動時と同様にどこにポイントがあるのかを生徒自身に  
考えさせることでピンポン球を落とす回数が大きく減少した。また、平均台を用いたリレーに  
関しては急いでピンポン球を落としてしまうか、ゆっくりと安全に行くか生徒自身が自己判断  
を行い、活動をすることができていて効果的なようであったと感じた。

全体を通して反省すべきところは準備の至らなさである。概ねの指導案に関しては全日の  
深夜、高学年の内容に関しては活動中にいくつか変更した点があり、活動と活動とのつなが  
りが感じられない時が2回ほど発生してしまった。また、道具に関しても全日の深夜にすべて  
準備したため十分な道具や、大きな道具を用意することができず、今回に関してはなんとか  
成功できたが、生徒の反応が悪かったり、他の指導者への伝達が上手くいっていなかったり  
すると、何をどこでどのように使うかが伝わらず、ただただとしてしまっていた可能性があつたと  
感じた。

しかし、人数も少なく活動内容に関してもすべて変更したが、指導者間でコミュニケーション  
をしっかりととり、生徒に楽しんでもらうということを一番に考えた結果、生徒が活動に飽きる  
ことなく講義を終えることができた。

初めは大失敗になるかと思ったが、全日に指導案をすべて変更し、その変更に関して4人  
の指導者間で話し合い事前から理解しておくことで成功を収めることができた。

何より、活動後に生徒達から言われた「こんなに楽しいなら週3回くらいやってほしい」とい  
う言葉に本日の活動に対する評価が示されており、やりがいを感じる事ができた。  
今後は事前準備に力を入れて、より効果的な活動の中で生徒を今まで以上に笑顔にしたい  
と思った。

表 9 第 6 回(11 月 13 日)実施報告書

実施日時	令和 4 年 11 月 13 日(日) 実施時間 9 時 30 分 ~ 12 時 00 分
会場	豊中市立南桜塚小学校体育館
対象学年	クラス 1: 第 1 学年~第 2 学年, クラス 2: 第 3 学年~第 6 学年
講師名 (氏名・所属)	██████████ (立命館大学スポーツ健康科学部)
実施内容 及び所見等	<p>1 実施内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ウォームアップ(リアクションボール)</li> <li>● 反応能力トレーニング(しっぽとり)</li> <li>● 分化能力トレーニング(ボールキャッチ・リフティング・パストレーニング)</li> <li>● 振り返り</li> </ul> <p>2 所見</p> <p>今回は分化能力と反応能力に関して焦点を当てて講義を行った。今回のプログラムは、段々と気温が低くなり、雨も降る中での実施であったため、充実したプログラムを行うにあたって十分な人数の確保が可能かどうか不安ではあったが、第 1 クラス・第 2 クラスどちらも 10 数名が参加してくれたため、グループ編成等で手こずることなく、円滑に進めることができた。</p> <p>反応能力トレーニングについては、比較的ルールが分かりやすく、かつ身体活動量の多い内容であったため、どちらのクラスでも活発的な活動が見られた。また、難易度を段階的に設定していたため、反応能力を養うには効果的なトレーニングであった。</p> <p>分化能力トレーニングについては、レベルや内容のバリエーションを豊富に設定していたため、子どもたちが自分の能力レベルに合わせた目標の達成に向けて積極的に運動を行っていた。また、今回は 4 人で指導を行ったため、少し人数が足りない部分は生じたが、豊中市役所の方々のサポートもあり、怪我や事故等の問題が生じることなく進めることができた。</p> <p>活動全体を通して、第 2 クラスは、比較的静かで円滑にプログラムを進めることができたが、第 1 クラスに関しては、大学生の話を聞かない子どもたちがちらほら見られ、第 2 クラスと比べると十分な身体活動量の確保が難しかった。また、用具の扱いが荒い印象があった。特に今回のプログラムは様々な用具を用いた内容であったため、道具の管理は注意していたが、十分に行うことができなかった。そのため、今後の活動では、プログラムを円滑に進める為の工夫や道具管理の徹底を意識して実践していく必要があると感じた。</p>

表 10 第 7 回(12 月 10 日)実施報告書

実施日時	令和 4 年 12 月 10 日(土) 実施時間 9 時 30 分 ~ 12 時 00 分
会場	豊中市立南桜塚小学校体育館
対象学年	クラス 1: 第 1 学年~第 2 学年, クラス 2: 第 3 学年~第 6 学年
講師名 (氏名・所属)	██████████ (立命館大学スポーツ健康科学部)
実施内容及び所見等	<p>1 実施内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ウォームアップ(ボール運び)</li> <li>● 分化能力トレーニング(的当て、遠投、王様ドッジボール)</li> <li>● リズム能力トレーニング(大縄)</li> <li>● 振り返り</li> </ul> <p>2 所見</p> <p>今回は分化能力とリズム能力に関して焦点を当てて講義を行った。まず、今回の講義で注意した点が2つあった。</p> <p>1つ目は 12 月に入り、気温が急激に低下したため、怪我をしないよう充実したウォーミングアップを行うことである。トレーニング開始時間よりも早く来た子どもたちと一緒に遊ぶことや、トレーニング前のウォーミングアップを充実させることを心がけた。その結果、怪我なく安全にプログラムを終えることができた。子どもたちの中には、半袖でトレーニングを行う子どもも見られ、子どもたちの元気に圧倒されつつも、一人一人の様子を見ながらプログラムを進めることができた。</p> <p>2つ目は、約束事を守ってもらうことである。前回の活動報告書にもあったように、第1クラスで講師の話をお聴かない子どもが散見され、プログラムを円滑に進めることができないという課題や、用具の扱いが荒いという課題があった。この問題を改善するために、トレーニング前の導入の部分で、①挨拶をすること、②お友達と仲良くすること、③大学生の話をしっかり聞くこと、を約束事として子どもたちに伝えた。その結果、うるさくなった時などに、「さっきの約束事なんだっけ?」といった声掛けを行い、子どもたちに約束事を意識させることで、円滑にプログラムを進行することができた。</p> <p>リズム能力トレーニングでは、大縄を使ってトレーニングを行った。①大縄を 30cm の高さに固定してジャンプするトレーニング、②大縄を蛇のように揺らしてジャンプするトレーニング、③大縄を左右に揺らしてジャンプするトレーニング、④大縄を回してジャンプするもしくは通り抜けるトレーニングを行った。第1クラスでは、①、②、③のトレーニングの時間を増やして、大縄をよく観ながらタイミング良くジャンプするといった技術の習得を注力させた。最初は引っかかる子どもが多かったが、回数を重ねるごとに成功する子どもが増え、苦手な子に対しては積極的にアドバイスを行うことで、子どもたちの運動有能感を高めることを意識した。</p>

第2グループに関しては、①、②、③の時間を短くして、④の時間を増やした。大縄が苦手だと言って怖がっていた子どもが、挑戦を続け④を飛べた瞬間は、喜びと同時に子どもの成長の早さに驚いた。

分化能力トレーニングでは、的当て、遠投、王様ドッジボールをおこなった。

的当てでは6つのステーションを作り、的からの距離を徐々に伸ばすことで、難易度に違いを作った。的当てが上手な子どもに対しては発展として、利き手と逆の手で投げさせることや、より遠い距離から投げさせた。

遠投では、的当てで培った指先の微細な感覚や、視覚的な距離感などとは違い、爆発的な力の発揮を意識させた。ここで感じた点として、的当てが上手な子が必ずしも遠投で遠くに投げられるとは限らず、逆に的当てが苦手な子がものすごい距離を投げることができるなど、同じ「投運動」でも能力に違いが生じていることがおもしろかった。

王様ドッジボールでは、これまでに行った、的当てと遠投の能力を統合させた力を要した。ドッジボールが得意な子どもが活躍したり、限られた子どもしかボールを投げない状況を作らないために、全員がボールを投げることや子どもたち同士で王様を相談して決めさせることを意識させた。王様を相手に伝えないルールで行ったので、王様ではない人を守り、相手を錯乱させるといった作戦などを子どもたち同士で考えており、柔軟な発想に感心した。

活動全体を通して、前回の課題を改善できたことや、今回のトレーニングのテーマであった、分化能力とリズム能力を養うところは達成できたのでよかった。また、プログラムの中での子どもたちの様子を見ながら臨機応援にトレーニングの時間や内容を変えて行けたことも良かった。また、次回は約束事を引き続き徹底させつつ、怪我なく安全にプログラムを終え、最高の形で測定につなげたい。

表 11 第 8 回(1 月 29 日)実施報告書

実施日時	令和 4 年 1 月 29 日(日) 実施時間 9 時 30 分 ~ 12 時 00 分
会場	豊中市立南桜塚小学校体育館
対象学年	クラス 1:第 1 学年~第 2 学年, クラス 2:第 3 学年~第 6 学年
講師名 (氏名・所属)	██ (立命館大 学スポーツ健康科学部)
実施内容 及び所見等	<p>1 実施内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ウォームアップ(じゃんけん変換リレー)</li> <li>● 変換能力トレーニング(トンネルくぐり バイバイ鬼)</li> <li>● 結合能力トレーニング(ボール落とし)</li> <li>● 振り返り</li> </ul> <p>2 所見</p> <p>今回は変換能力と結合能力に関して焦点を当てて講義を行った。今回は雪がたくさん降る週で寒い中での実施であったが、第 1 クラス・第 2 クラスでも実施できる人数が集まってくれた。気温が低く、体が温まるか心配であったが、子供たちは全力で取り組んでくれたため、体が温まった状態でずっと実施することができた。また、体が冷えないように、実施内容の順番を少し変えたり、第 2 クラスでは時間が少しあまりそうだったので、実施内容の時間を全部延ばしたりできた。</p> <p>ウォームアップでは、じゃんけんの仕方の説明をし、じゃんけんの練習を取り入れたため、リレー時にじゃんけんの仕方が分からないというようなことが起こらず、スムーズに取り組む事ができていた。チーム編成が女子だけのチームであったり、男子だけのチームになったり力関係に偏りがあったが、じゃんけんが少し難しいので走る速さなど関係なかったので、平等になっていた。</p> <p>変換能力トレーニングや結合能力トレーニングでは、トンネルくぐりやバイバイ鬼、ボール落としなど初めて実施した子がほとんどであったが、見本を見せたり、練習時間が設けられたりしていたので、本番でスムーズに進めることができていた。また、大学生が多く、分からない子に個別で教えることができた。ボール落としでは、腕でボールを固定している子が多く見られたので、途中でもう一度ボールの持ち方の復習を入れたりした。</p> <p>活動全体を通して、1 クラスでは説明を遮って話してしまう子や運動をしたくないという子がいたが、練習する時間を設けたりしていたので、身体活動量が少なすぎるということがなかった。したくない子に関しては、大学生が多くいたのでその子の支援をしてもらったり、少しでもしてもらえるように声かけをしてきていた。第 2 クラスでは、大学生の話をしっかり聞いてくれたので、円滑に実施することができたが、1 つの種目をする時間が少し長いときもあったので、もう 1 種目追加しても良いと思った。</p>

表 12 第 10 回(3 月 19 日)実施報告書

実施日時	令和 4 年 3 月 19 日(日) 実施時間 9 時 30 分 ~ 12 時 00 分
会場	豊中市立南桜塚小学校体育館
対象学年	クラス 1: 第 1 学年~第 2 学年, クラス 2: 第 3 学年~第 6 学年
講師名 (氏名・所属)	██████████ (立命館大学スポーツ健康科学部)
実施内容 及び所見等	<p>1 実施内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● ウォームアップ(しっぽとり)</li> <li>● スラックライン・的当て</li> <li>● ドッチボール・ドッチビー</li> <li>● 振り返り</li> </ul> <p>2 所見</p> <p>前回でポストテストが終了したため、今回のプログラムは、これまでのプログラムに参加してくれた子どもたちがやりたいことをメインに行うよう、指導計画の作成にあたった。また、今回が豊中プログラムの集大成でもあったため、これまでこのプログラムに携わったゼミのメンバーの意見も取り入れながら作成するよう心がけ、意見の出した「スラックライン」や「ドッチボール(ドッチビー)」を中心に指導計画を作成した。</p> <p>当日は、とにかく「怪我無く終える」ことができるよう安全管理に十分注意し、場づくりを行った。特に、スラックラインは設置したことがなかったため、上手くいけるか心配ではあったが、豊中市の職員の方の協力もあり、何とか設置することができた。プログラムが始まってからは、進み具合を考慮しながら、内容を少し削るなど臨機応変に対応して進めることができた。最後のドッチボール・ドッチビーに関しても 1 ゲームずつ行うことができ、子どもたちの満足している様子が見られた。ただ、子どもたちの中には振り返りを書き忘れた子どもも散見されたため、何か大学生にメッセージをかけるような用紙を用意しておいてもよかったのではないかと感じた。</p> <p>全体を通して、まずは怪我無く終えることができたので良かった。また、最後に子どもたちの楽しんでいる姿を見ることができたので良かった。指導計画の作成が 2 日前になってしまい、当日も卒業式等の関係で用具が全て倉庫にしまっているなど、イレギュラーなことが多かったにも関わらず、尽力してくださった豊中市の職員の方をはじめ、当日参加してくれたゼミのメンバーには心から感謝したい。</p>

## 2 節 基礎的運動能力への効果

プロジェクトに参加した豊中市内の小学校に在籍する小学1年生から6年生の内、プレテスト(6月19日)とポストテスト(2月18日)の両方に参加した19人(クラス1:12人、クラス2:7人)を対象とした。プロジェクト前後で「20m走」、「飛び越しくぐり」、「立ち幅跳び」、「片足立ち」、「長座体前屈」、「反復横跳び」の6つの項目を測定し、それらの平均値の差を、対応のある*t*検定で分析し、結果を表13に示した。5%を統計的有意水準とした。また、各群における測定項目の介入前後の差を図1～図7に示した。

表 13 分析結果一覧

種目		pre	post	<i>t</i> 値	<i>p</i> 値	
10m走	全体(n=19)	2.43(±0.16)	2.41(±0.20)	0.44	0.33	n.s.
	クラス 1(n=12)	2.46(±0.16)	2.36(±0.18)	1.69	0.05	n.s.
	クラス 2(n=7)	2.39(±0.16)	2.49(±0.21)	-1.06	0.16	n.s.
20m走	全体(n=19)	4.50(±0.38)	4.39(±0.37)	1.32	0.10	n.s.
	クラス 1(n=12)	4.53(±0.36)	4.32(±0.28)	2.19	0.02	*
	クラス 2(n=7)	4.46(±0.44)	4.51(±0.48)	-0.36	0.36	n.s.
飛び越しくぐり	全体(n=19)	14.2(±3.53)	12.4(±2.56)	2.44	0.01	*
	クラス 1(n=12)	14.73(±4.03)	12.92(±2.91)	1.71	0.05	n.s.
	クラス 2(n=7)	13.34(±2.48)	11.73(±1.76)	2.07	0.04	*
立ち幅跳び	全体(n=19)	134.74(±23.88)	135.74(±21.38)	-0.16	0.43	n.s.
	クラス 1(n=12)	126.50(±20.08)	134.75(±15.36)	-1.66	0.06	n.s.
	クラス 2(n=7)	148.86(±24.55)	137.43(±30.54)	0.85	0.21	n.s.
片足立ち	全体(n=19)	19.88(±17.82)	18.45(±13.83)	0.33	0.37	n.s.
	クラス 1(n=12)	17.52(±15.86)	17.68(±15.17)	-0.03	0.48	n.s.
	クラス 2(n=7)	23.94(±21.47)	19.78(±12.21)	0.46	0.32	n.s.
長座体前屈	全体(n=19)	28.28(±6.38)	29.84(±7.25)	-1.03	0.15	n.s.
	クラス 1(n=12)	27.50(±3.70)	31.75(±5.82)	-2.94	.007	**
	クラス 2(n=7)	29.64(±9.68)	26.57(±8.71)	1.25	0.12	n.s.
反復横跳び	全体(n=19)	30.63(±5.77)	33.32(±3.77)	-2.72	.007	**
	クラス 1(n=12)	28.25(±4.43)	32.17(±3.38)	-3.17	.004	**
	クラス 2(n=7)	34.71(±5.76)	35.29(±3.81)	-0.41	0.34	n.s.

n.s. : not significant

means S.D.

\**p*<.05 \*\**p*<.01

クラス 1: 低学年クラス クラス 2: 高学年クラス

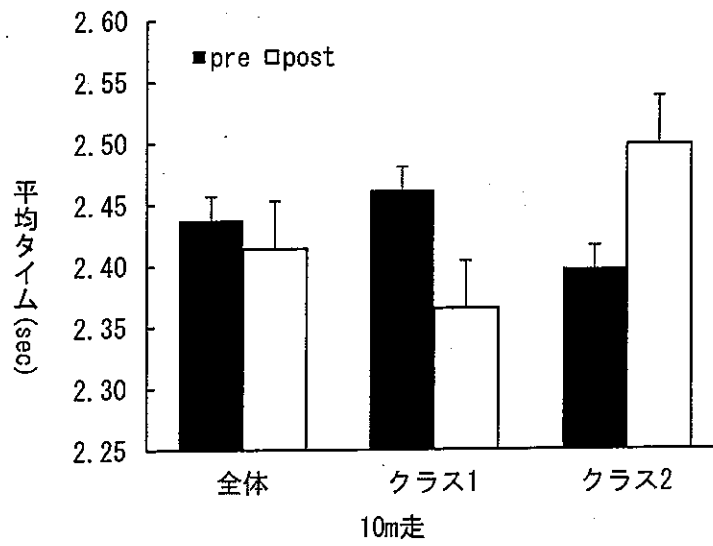


図1. 各群における10m 走の記録の変化

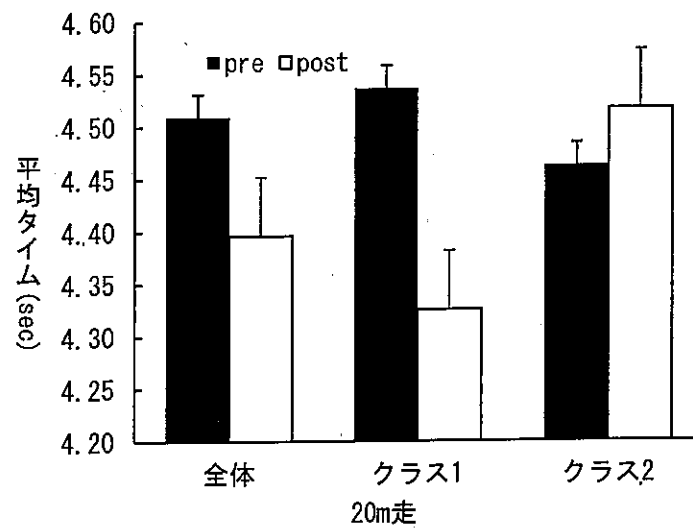


図2. 各群における20m 走の記録の変化



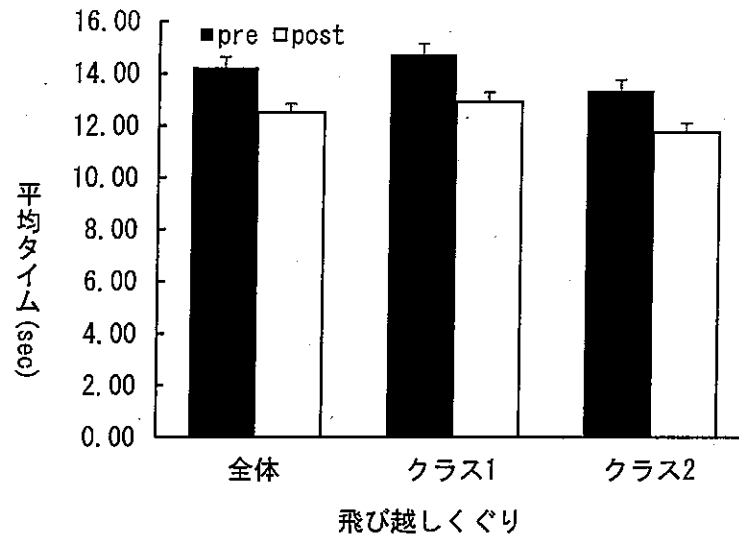


図3. 各群における飛び越しくぐりの記録の変化

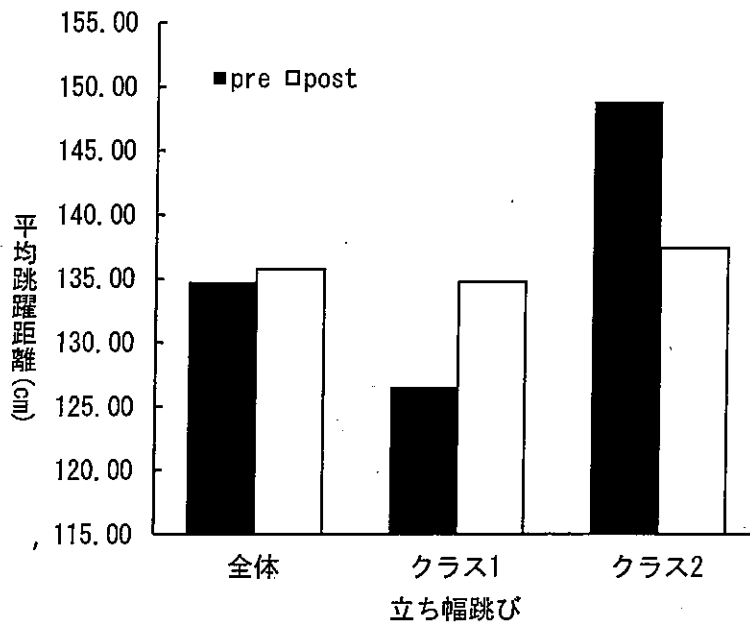


図4. 各群における立ち幅跳びの記録の変化

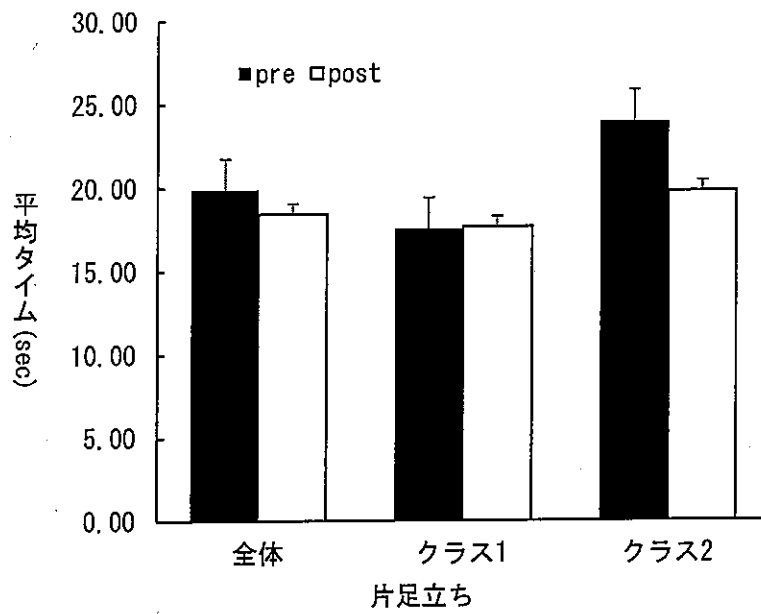


図 5. 各群における片足立ちの記録の変化

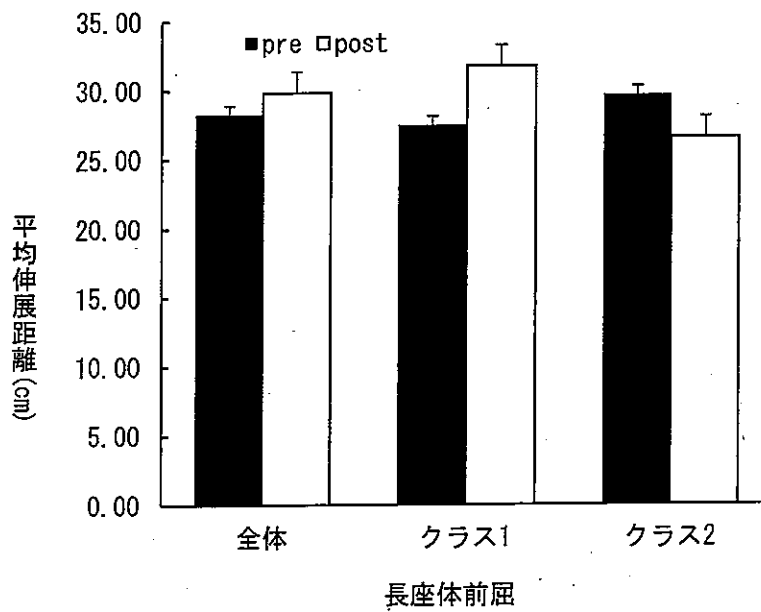


図 6. 各群における長座体前屈の記録の変化

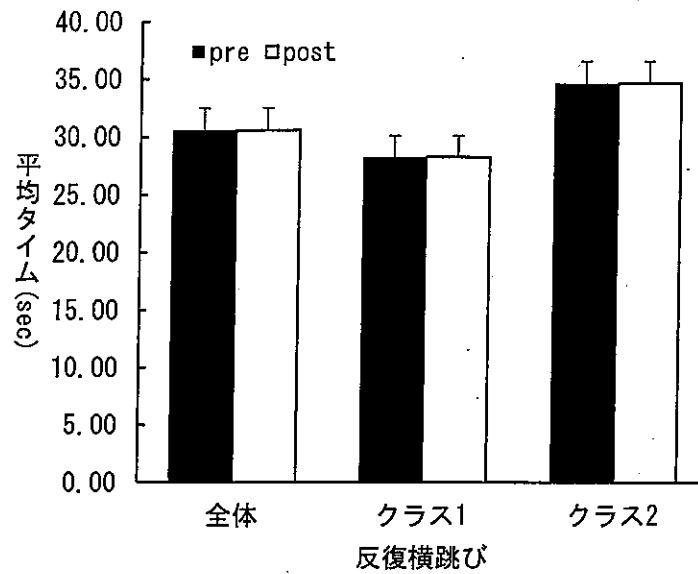


図 7. 各群における反復横跳びの記録の変化

その結果、20m 走についてはクラス 1 においてプログラム実施前後で有意な差が認められた ( $t=2.19, p<.05$ )。また、飛び越しくぐりについてはクラス 2 及び全体においてプログラム実施前後で有意な差が認められた (全体 :  $t=2.44, p<.05$ , クラス 2 :  $t=2.07, p<.05$ )。さらに、長座体前屈についてはクラス 1 においてプログラム実施前後で有意な差が認められた ( $t=-2.94, p<.01$ )。加えて、反復横跳びについてはクラス 1 及び全体においてプログラム実施前後で有意な差が認められた (全体 :  $t=-2.72, p<.01$ , クラス 1 :  $t=-3.17, p<.01$ )。

### 3 節 形成的授業評価

次に、クラス1とクラス2の参加者を対象に、授業ごとに回答してもらった計7回の形成的評価及び形成的評価の診断基準に基づいた評定の推移を調査した。その結果は表14に示した。トレーニングを通じて何か得たものがあったかどうかに関わる成果については、ほぼすべての回で高い評価が得られた。しかし、意欲・関心については、全回において、普通程度の評価であった。学び方については、第3回～5回において高い評価がみられた。さらに、児童同士の協力については、第3回及び第5回に高い評価が得られた。総合評価としては、全回において、比較的高い評価が得られたが、特に第3回と第5回に高い評価が得られた。

表 14 形成的授業評価の結果

因子	回数	2	3	4	5	6	7	8
成果	全体	<u>4.67</u>	<u>4.60</u>	<u>4.73</u>	<u>4.63</u>	<u>4.68</u>	<u>4.56</u>	<u>4.53</u>
	クラス1	<u>4.55</u>	4.37	<u>4.68</u>	<u>4.69</u>	<u>4.58</u>	4.33	<u>4.50</u>
	クラス2	<u>4.84</u>	<u>4.86</u>	<u>4.79</u>	<u>4.57</u>	<u>4.80</u>	<u>4.77</u>	<u>4.58</u>
意欲・関心	全体	4.16	4.31	4.20	4.45	3.88	3.78	4.15
	クラス1	3.94	4.25	4.00	4.46	3.64	3.54	4.00
	クラス2	4.46	4.40	4.44	4.45	4.20	4.00	4.37
学び方	全体	4.14	<u>4.77</u>	<u>4.60</u>	<u>4.54</u>	4.08	4.34	4.45
	クラス1	3.86	<u>4.83</u>	4.40	<u>4.69</u>	4.07	4.36	<u>4.50</u>
	クラス2	<u>4.53</u>	<u>4.70</u>	<u>4.84</u>	4.36	4.10	4.33	4.37
協力	全体	3.93	<u>4.27</u>	3.75	<u>4.31</u>	3.82	3.73	3.90
	クラス1	3.83	4.25	3.33	4.07	3.92	3.63	3.75
	クラス2	4.07	4.30	4.23	<u>4.61</u>	3.70	3.83	4.12
総合評価	全体	4.27	<u>4.50</u>	4.37	<u>4.50</u>	4.18	4.15	4.28
	クラス1	4.10	4.42	4.17	<u>4.50</u>	4.12	4.01	4.22
	クラス2	<u>4.52</u>	<u>4.60</u>	<u>4.60</u>	<u>4.51</u>	4.26	4.26	4.38

※太字下線は 4.5 以上の高い評価

## 第4章 本調査研究の総括

### 1節 本調査の結果の成果

今回は全10回に渡って基礎的基本的な動きづくりを目的とした運動として、コーディネーショントレーニングを行い、トレーニング前後で「20m走」、「飛び越しくぐり」、「立ち幅跳び」、「片足立ち」、「長座体前屈」、「反復横跳び」の6つの項目を測定した。また、プレテストとポストテスト、最終回(3月19日)を除く7回分に渡って形式的授業評価尺度を用いて、トレーニングの各回の授業評価を行った。

その結果、体力・運動能力の6つの測定項目については、「20m走」はクラス1においてプログラム実施前後において有意な差が認められ、「飛び越しくぐり」についてはクラス2及び全体においてプログラム実施前後において有意な差が認められた。さらに、長座体前屈についてクラス1においてプログラム実施前後で有意な差が認められた。加えて、反復横跳びについてはクラス1及び全体においてプログラム実施前後で有意な差が認められた。これらの結果、特にコーディネーション能力を評価している「飛び越しくぐり」及び「反復横跳び」に有意な記録の向上がみられたことより、本研究において実施したプログラムによって、対象児童のコーディネーション能力は有意に向上したことが示唆された。

形式的授業評価の結果に関しては、総合評価に関して全体で一番高い評価は3回目と5回目だったことが分かった。クラス1は5回目の評価が一番高かったがクラス2は3回目及び4回目が高いことが分かった。3回目のプログラム内容については「スポーツリバーシ」、「ドッジビー」、「ラダー」、「リアクションボール」だった。子どもたちにとって普段見慣れない運動をしたので、新規性への興味・関心により高まったこと、加えて、初めて実施する運動内容ができたときの達成感や関心が高い要因になったと考えられる。

### 2節 本調査研究の課題とまとめ

本プロジェクトによる運動指導は、月1回の開催でしたため、実施回間の期間が開いていたため、本プロジェクトの指導効果なのか、通常の児童の発達の効果なのか、さらには、他の習い事による効果なのかはさらに検討が必要であると考えられる。よって、有意な差が全体を通して認められた「飛び越しくぐり」及び「反復横跳び」をどのように評価するかは、引き続き課題となった。しかし、本プログラムの実施によって、多くの測定項目が向上していることより、体力・運動能力への向上の効果は一定あると考えられる。

しかし、毎回のプログラムへの参加者の運動の取り組みを観察していると、運動を肯定的に捉えている様子が見えかけた。これより、当初のねらいであった、運動への親和性を向上させるという点については達成できた可能性はある。運動習慣を身に付け、積極的に運動をしたいという関心を身につけさせるには、このプログラムのみで有用なのではなく、できなかった運動プログラムは「おうちに帰ってもと挑戦してみてね」などの声掛けなどを積極的に行うことが必要であると考えられる。

さらに、家や学校であるものや使えるものを用いた方が運動しやすい環境がつかれるので、今後は、学校教育などでも、積極的に工夫して、自ら運動しようとする子どもたちが増えるのではないかと考える。

## 謝辞

最後になりましたが、本研究を遂行するにあたり、豊中市の関係者の皆様、豊中市立南桜塚小学校の校長先生及び関係者の皆様、保護者の皆様等から、極めて温かなご協力を頂きました。

各位に対して、心より感謝申し上げます。